

## 令和3年度学校関係者評価シート(年度末評価)

令和4年3月31日

校番	202 127	学校名	広島県立広島観智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋 一彦	全・定・通	本・分
----	------------	-----	--------------------	------	-------	-------	-----

評価項目	評価	理由・意見
目標、指標、計画等の設定の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍の中で行動等制限される中、最大の目標、指標、計画をお作りになっている。</li> <li>・経営目標の(1)(2)の評価指標に、教師から得るデータだけでなく、子ども、そして保護者、地域住民や県内外のステークホルダーから得られるデータを含めて、いかに多面的な評価を行うかが課題である。意図・実施・達成されたカリキュラムと、周囲に評価されたカリキュラムの成果等を多面的に捉えていきたい。</li> <li>・過度な負担とならない程度に、全方位的な評価を取り入れることを検討したい。結果的にそれは、HiGA の応援団を増やすことになるのではないかな。</li> <li>・目標に対して成果も十分伺える。教職員が組織の中で役割も明確にされており、指標・計画とも適切と思われる。</li> </ul>
計画の進捗状況の評価の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・開校3年が経過し、方向性も定まり、順調に学校運営ができていていると感じる。</li> <li>・とくに所属感や連帯感の形成、寮の規律ある生活や安心・安全な生活環境づくり、人と人との関係性等については、改善が顕著である。これまでの学校の課題を踏まえた計画と取組が行われ、実際に成果を出していることは特筆に値する(コロナが落ち着いた段階で、寮生活の様子や生徒会活動の様子を見学させていただけると有難い)。</li> <li>・基準にもとづいて適切に評価できている。</li> <li>・コロナ禍で厳しい環境(状況)の中、しっかりとコロナ感染対策もできており、計画の進捗状況も実績よりみて、順調で適切であると思われる。</li> <li>・全体としては明確な論拠に基づいた的確な自己評価がなされている。</li> </ul>
目標達成に向けた取組の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目標達成に向け、様々な工夫がされている。職員一丸となって取り組んでおられる。</li> <li>・効果的な取組が実施されている。</li> <li>・とくに①ATL スキルを効果的に活用させる指導、②教科横断的な学びを具体化する IDU 実践(教科の組み合わせと学習テーマの設定)と IDU「ウィーク」という運営形態、③学校のミッション・ビジョン・バリューを子ども自身が発信し、子ども同士で語り合う環境づくりは、秀逸である。一条校としての使命と IB 校としての目標を上手に調停しつつある。とくに②③は県内の他校でも参考にすべき取り組みではないかな。</li> <li>・変化に柔軟に対応した取組が行われた。</li> <li>・管理職の先生方、現場の先生方が一体となった取組に大変感服いたしました。欲を申せば、海外からの留学生を迎えるステージとなり、外国人の先生方にも何らかの形で学校経営の主要な部分に関わって頂く形があってもよいのではないかと存じます。</li> </ul>
評価結果の分析の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・適切に分析できている。評価結果が指摘するように、組織が拡大し、DP が本格化し、生徒の国際化が進んでいく中で、業務内容の複雑化は、深刻な課題である。</li> <li>・業務の「数」を整理するスクラップアンドビルドも大事だが、「質」を管理できる組織構築も不可避である。業務を個人に割り振るのではなくチームで担当させること、チーム内で業務の遂行状況をチェックし、業務の割り付けや引きはがしや再配置を行うマネージャー(主任)の管理能力を向上させること、さらにマネージャーの能力を鍛える研修が不可欠である。</li> <li>・コロナ禍でも目標を達成できており、数字には表れない環境等も勘案してもっと自己評価を上げてよいのではないかな。</li> <li>・きちんとした事前調査、データ収集に基づいており、問題ない。</li> </ul>
今後の改善方策の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・適切に改善方策が示されている。</li> <li>・休日の過ごし方は、教員のみならず、生徒にもよく考えさせたい。運動量の確保は必須であるが、定期的に学校を離れる機会を保障してあげることも必要だろう。</li> <li>・多様な進路実現に向けて、①高校生には県内大学が提供する AP クラス(大学の単位を付与する)を受講させたり、②専門分野のラボに訪問させたり、③各種機関のインターンシップに参加させたりしたい。生徒には、できるだけ自由な学びの機会を提供することで、個人プロジェクトの準備の場としていくことも必要だろう。</li> <li>・海外からの留学生のケア、および今後数が増える外国人スタッフとのコミュニケーション体制について若干危惧している。留学生の中には、実は英語が「第一言語」ではない場合もありえる。本人が一番安心して話せる言語は何か、その言語によるサポートは可能か、今一度検討が必要。留学生生活において当初感じるストレスは大人であっても相当なものがある。特にDP課程が始まってからの物理的、精神的プレッシャーは母国語であっても大変なものである。できれば常駐のカウンセラーを配備する、あるいは日常的に彼らの話を聞いてあげられる体制を整備しておく。</li> </ul>
総合評価	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒会活動を中心に、生徒の自立的な活動、能動的な発信、そして自治的活動が定着している。生徒を信頼し、留学生とともにインクルーシブな関係を築こうとする姿を応援したい。</li> <li>・学校と地域のつながりが、これまで以上に濃密になっている。地域が学びの場として成立している。地元の人を巻き込みながら、成果や主張をグローバルに発信できる体制を支援したい。</li> <li>・「平和」に対する生徒の意見表明動画は、3年間の学びの成果と推察される。</li> <li>・留学生の受け入れに向けて丁寧な準備が行われている。母語で会話できる人的ネットワークはもちろん、学校・島を離れてリフレッシュする機会の提供、ジム等で汗を流すなど環境整備などを進めていきたい。</li> <li>・既に、観智学園は日本におけるIB一条校のフロントランナーである。今後も良きロールモデルとして、ますますのご発展を遂げていくことを今後は一人の観智サポーターとして祈念している。</li> </ul>